

## 私の障がい児教育の原点



鳴門教育大学 学長

山下 一夫

鳴門教育大学附属特別支援学校、創立五十周年、おめでとうございます。

学長として、大学と附属特別支援学校とのさらなる連携協力を核に、保護者の方々、教育委員会、他の学校等との連携を強固にして、子どもを支え教育していくネットワーク作りをこれからも進めていく所存です。ここでは私事で恐縮ですが、連携・結びつきの私の原点と言える、ある出会いについて述べさせていただきます。私が大学院に進学した四十年ほど前のことです。就学前の子どもと保護者を対象とした相談機関に、週一回、一人五十分、四コマ、担当したことがあります。その中のA君は、自閉症と診断されており、母親と別れても平気な様子でプレイルームに入室し、横にいる私を気にかけるそぶりもなく、一人おもちゃの世界に没頭していました。言葉も、当時テレビやラジオのCMで盛んに流されていた「マルシンハンバーグ」を早口で連呼するか、物の名前をときたま言うぐらいです。私はA君に寄り添い、A君の気持ちになつて声かけすることに努めました。

そうこうするうちに夏となり、近所のプールでの特別面接となりました。A君は、手洗い場でジョウロに水を入れ、水をまくと、二メートルほど下のプール場にジョウロを投げ捨てます。そこで、私は手洗い場の端を

回ってそのジョウロを拾い、再び手洗い場の端を回って、つまり小走りです五メートルほどを歩き来し、A君に手渡ししました。A君は無表情でそれを受け取ると、同じようにジョウロに水を入れ、まき、投げ捨てました。私も拾いに行き、A君に手渡します。

それが十回以上繰り返され、A君にジョウロを手渡したとき、A君は相変わらず無表情で私の方を見もしないで、しかし小声で「ありがとう」とつぶやいたのです。そして、プール場に入っていきました。私はただただ驚くとともに感動しました。そして、A君のことが今まで以上に好きになりました。

このことによって、A君が劇的に良くなったというわけではありません。しかし、A君の横についてA君の気持ちや前よりも察することができるようになりました。言葉を介して通じ合うことが必ずしも上手くいかないときがあっても、A君の心臓と自分の心臓が重なり合い、A君の喜び、驚き、悲しみ、怒りが、自分のことのように感じられることが多くなったように思います。A君もまた、私といて楽しいと思うことが増えたように思いますし、私の気持ちも少しは察してくれるようになったのではないのでしょうか。まさにA君との出会いが、私自身の障がい児教育の原点であり、私の人間観に大きな影響を与えました。

ちなみに、当時の指導教員であった河合隼雄先生にこのジョウロの一件を報告すると、先生は「何の遊びかわかりますか？ いないいないばあ遊びですよ」と言われました。その後、私は人間の成長を「依存と自立のサイクル」と名付け、カウンセリングや生徒指導における根本的な理論として提唱するようになりましたが、そのきっかけの一つが、このA君とのジョウロのやりとりです。

障がいのある子は一人一人その特性が違います。子に寄り添う特別支援教育の更なる発展を願ってやみませ

